

主の昇天

2010.5.16

(ルカ 24 : 46～53)

復活節は、今日の主の昇天の祝日で幕を閉じます。復活されたイエスは、天に昇るまで40日間、何度となく愛する弟子たちの前に現われました。そのたびにもう私はすべてをゆるしている。逃げ出したことを気にしないでいい。元気が出てきたか？ 食べる物はあるか？ とどこまでも弟子たちを思いやり励まし続けました。

聖書と典礼の挿絵に、昇天されるイエスの姿が足だけ描かれています。今日は、その時イエスがどのような気持ちだったのか、どんな表情だったのか、また、私たちに何を託そうとされたのか考えてみましょう。

5週間前に私は、イエスの十字架上での釘跡と、反対を押し切ってイエズス会に入会することで与えた家族への心の釘跡を重ね合わせる話をさせていただきました。どちらの釘跡もよく見ることで、心の重荷だと思っていた釘跡に感謝できることを、分かち合いました。その続きを少しご紹介させていただきますと、先週の日曜日、母の日に、感謝の気持ちと不安をこめて実家に電話をしました。母は、わたしと父との間を取り持ってくれていました。父は「秋の式典（つまり司祭叙階式のことですが）に参加して、お世話になった方々にお礼を申し上げたい」とまで言ってくれているそうです。この5週間の間に、両親の心が少しずつ変化しているようです。お祈りいただいた皆様にも、この場をお借りして、感謝申し上げたいと思います。

この父の言葉は、天にのぼる前に弟子たちに伝えようとしたイエスの思いに重なっているようです。イエスは、自分のすべてを与え、自分が尽きるまで、弟子たちを愛されました。私の父にしても、自分のすべてを息子の私に与え尽くそうとしているのでしょう。父は銀行員でしたが、不動産部にいたこともあり、住宅営業の仕事をしていた私が行き詰まって、相談の電話をすると、的確なアドバイスをくれました。電話口で「人との出会い、関わりを大切にしてください。最後まで逃げずに責任を持って仕事をしてください」と励ましてくれました。そのおかげもあって、たとえば、打ち合わせの途中で、声を荒げたり、机を蹴飛ばしたりするお客様も見えましたが、家が完成するまで誠意を尽くすことができました。私は12年務めたのち退社して、父としたら、思いもよらない道に入ってしまう、戸惑いがあるでしょう。それでも、分からないなりに親としての最後の務めを果た

そうという思いで「お世話になった方々にお礼を申し上げたい」と言っているように感じます。

イエスにしても、父にしても、尽きない思いから最後の務め、最後の言葉を私たちに与えてくれます。何も心配しなくていい。私はお前を全力で守る。挽回するとか、恩返しするとか一切思わなくていい。「ただ、思った道を精一杯行きなさい」という気持ちで送り出してくれているのでしょ

う。私の体験を、分かち合わせていただきましたが、皆さんにとっての家族友人、最愛の人との関わりも、本質的には同じものだと思います。離れたくない、別れたくない、尽きない思いを最後まで伝えようとしたつながりは、ずっと続いています。今でも私たちを支え、励ましを与えようとされています。身近な人との最後の関わりを思い出すと、イエスがどれほどの思いをこめて天に昇られたか想像しやすくなるでしょう。

さて、最愛の人から送り出される言葉をもらった私たちは、どのように生きてらいいのでしょうか？ それは、肉体を持ったイエスが天を離れるときに私たちに託したことに発展するでしょう。

父の言葉に戻って考えます。「人との出会い、関わりを大事にしなさい」という教えを、イエスの心で実践すること。イエスの柔和で謙遜な心で人と関わり、最後まで大切にすることが、イエスから託された使命だと今感じています。

第1朗読でイエスは「あなたがたは、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」と言われます。「地の果てまで」と書かれていますが、実際には、生活のこまごまとしたところ、些細な出来事をイエスの心、柔和で謙遜な心で受け止め、イエスの心を添えてまわりに、社会に返していく。このような使命を私たちは託されています。

イエスが天に昇られて、イエスの心の人々に示す責任は私たちが担うことになります。責任を重たく感じるかもしれませんが、天の昇られるイエスは、恐れることはない、むしろあなたたちに期待を掛けて楽しみにしている、とほほ笑んでおられるでしょう。イエス様から託された使命を期待と喜びとして受け止められるように、この主の昇天のミサの中で願いましょ

イエズス会助祭 柴田 潔